

原 著

ぬり絵作品における制作順序に関する考察

A study on the process of coloring among young and elderly people

上島 健¹⁾ 安藤 啓司²⁾

Abstract

Introduction: A coloring activity is commonly used in Japanese Occupational Therapy (OT) for elderly people. This study investigated the process of coloring activity among younger and older people.

Subjects: The subjects were 29 younger people (age: 20.3 ± 1.4) who were healthy (younger group), and 18 elderly people (age: 75.4 ± 11.9) who were receiving care at a Japanese Day-care center (Day Care group).

Methods: The participants were instructed to color a simple line drawing of a man and woman pounding rice with a pestle (size: 297 x 210mm) using 24-color set of pencils. The image depicts an annual event in Japan. To record the sequence of adding colors, the line drawing was divided into the following 16 areas and labeled alphabetically (A through P); A: Hair, B: Face, C: Clothes, D: Hands, limbs of rice-pounding man, E: Hair, F: Face, G: Clothes, H: Hands, limbs of woman assisting him, I: Wood mallet, J: Mortar, K: Rice-cake in the mortar, L: Bucket, M: Stand of bucket, N: Table, O: Rice-cake on the table, P: Background.

Results: The average coloring sequence of the younger group was as follows: A:5.2, B:3.9, C:7.1, D:4.5, E:7.3, F:7.1, G:9.1, H:7.0, I:4.8, J:6.5, K:12.6, L:10.1, M:10.7, N:10.3, O:13.4, P:15.1. The average of coloring sequence of the Day Care group was as follows: A:4.5, B:9.0, C:5.0, D:8.5, E:4.6, F:8.9, G:7.7, H:9.0, I:5.0, J:7.3, K:11.6, L:8.8, M:9.1, N:7.4, O:12.8, P:15.1.

Concordance of the coloring sequence analyzed by Kendall's coefficient of concordance was significant ($p < 0.01$). Positive correlation of the coloring sequence of the younger group was significant in the following 10 pairs according to Spearman's correlation coefficient: A-C, A-E, B-C, B-D, D-H, E-F, E-G, F-H, I-J and N-O. Positive correlation of the coloring sequence of the Day Care group was significant in the following 14 pairs: A-E, B-D, B-F, B-H, D-F, D-H, F-H, I-J*, I-L, I-M, J-L, J-M, J-P and K-O ($p < 0.05$).

1) Takeshi Kamishima
大阪河崎リハビリテーション大学
リハビリテーション学科 作業療法学専攻
E-mail: kamishimat@kawasakigakuen.ac.jp

2) Hiroshi Ando
神戸大学大学院 保健学研究科

Conclusion: The parts of man, women and Wood mallet were colored earlier (order<5.0) in both groups. This indicates that participants started painting from the principal person and device of the picture. The positive correlation in the coloring sequence indicates that each area of the pair was colored with similar order. These findings indicate the presence of tendencies in the sequence of coloring. This information may be useful for clinical assessment and intervention by OTR for elderly people participating in coloring activity.

Key Words : ぬり絵、順序、着色、過程

1. はじめに

ぬり絵活動は、作業療法で用いられる絵画活動に含まれ、老年期障害分野での臨床活動で用いられることの多い活動の一つである¹⁻³⁾。ぬり絵は下絵の枠内に色を塗る作業が中心であるが、下絵の選択により難易度が調整できることから、子どもから高齢者まで幅広く用いることができる活動である。高齢者では、対象者の視覚機能（視力、色彩識別能力）の低下や老視の程度に合わせて、下絵の塗る枠内の大小を選択することにより、対象者が取り組みやすい下絵を選択することができ、作業療法士（以下、OT）は対象者の身体・認知機能を評価した上で作業を円滑に導入することができると考えられる。

ぬり絵活動において、下絵をどこから塗り始めるかという制作順序は、参加者の自由に任されることが一般的であり、どのような色を使用するのか考えて想像する過程や、色が徐々に塗られていく過程を楽しむことができる。しかし、ぬり絵をしようと言う気持ちはあっても、下絵のどの部位から塗り始め、次にどのように塗るかという順序の見通しが立たなければ、下絵を眺めているだけで作業が進まずに時間だけが経過し、ぬり絵作業への取り組みを諦めてしまうことにつながりやすい。このため、OTが塗る部位や使用する色等について助言することによ

り、ぬり絵作業が継続できることも多く、OTの助言は重要である。

ぬり絵の制作における助言では、できるだけ参加者の意向を確認しながら塗り進めていくことが重要であるが、OTの助言によって作品を完成させていく時には、助言者の意向が少なからず含まれてしまう。このため、同じ下絵に対して多数の参加者を対象に、作品が作成されていく平均的な過程を把握することができれば、様々な参加者に対する適切な助言につなげることができると考えられる。先行研究には、ぬり絵の制作順序やその過程に関する研究論文が見当たらず、塗る順序について議論はされていない。このため、本研究では下絵の塗る順序について、前半または後半に取り組み始める場所に関して一貫性があるという仮説を立て、作品の塗る順序に着目して検討することとした。

ぬり絵活動においては、色鉛筆を持って動かすという動作と、どの順序で塗るのかという判断の2つの側面が適切に働く必要がある。このため、この両面において問題がないと考えられる健常成人と、ぬり絵がよく用いられるデイケア利用者を対象とし、両者の塗る順序の過程について検討したので報告する。

2. 対象と方法

2.1 対象

対象は、本研究の趣旨を説明の上、文書にて同意を得られた者で、健常成人29名（以下、健常成人群）、通所リハビリテーション利用者18名（以下、デイケア群）である。健常者群およびデイケア群の男女比率、平均年齢について、前者は男性12名、女性17名、平均年齢 20.3 ± 1.4 歳、後者は男性7名、女性11名、平均年齢 75.4 ± 11.9 歳である。デイケア群の要介護認定は、要支援1が1名、要支援2が3名、要介護1が2名、要介護2が3名、要介護3が4名、要介護4が5名、要介護5が0名である。

2.2 方法

健常成人群、デイケア群の対象者に、図1に示す下絵⁴⁾ (A4サイズ: 297×210 mm) を提示し、24色の色鉛筆（三菱色鉛筆 No.850）を使用して下絵を1時間程度で自由に塗るよう指示した。参加者が下絵を塗る順序は、約5分毎にデジタルカメラで撮影し、どの部位から着色したのかを記録した。下絵の部位は、図2に示す16箇所 (A~P) を対象とし〔男性 (A:髪・B:顔・C:服・D:手足)、女性 (E:髪・F:顔・G:服・H:手足)、I:杵、J:臼、K:臼の餅、L:桶、M:桶台、N:餅台、O:餅台の餅、P:背景〕、各部とも最初に着色した時点の順序とした。同時に塗った箇所は同一順序とし、塗らなかった箇所については最終の順序とした。



図1 ぬり絵に用いた下絵（文献4）

下絵の塗る部位が細かくならず、多くの参加者が理解しやすい餅つき場面を選択した。

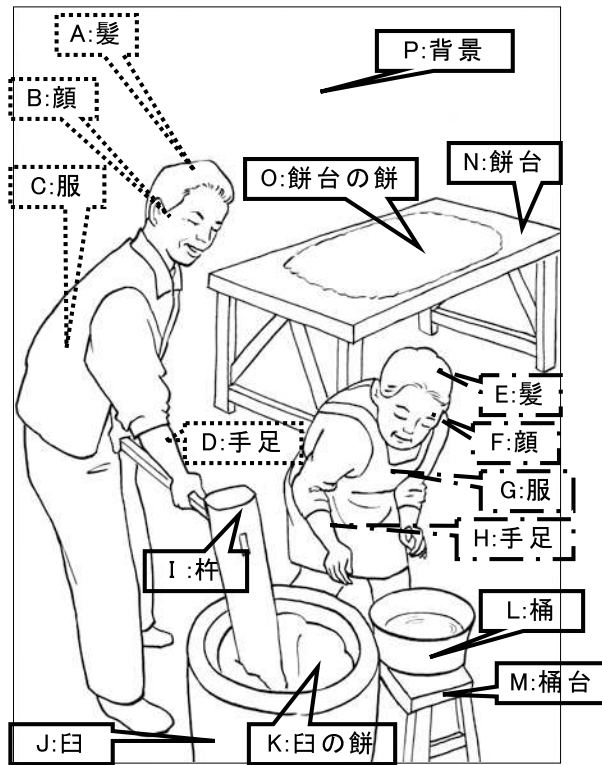


図2 むり絵に用いた下絵（文献4を一部改変）

下絵の塗り始める部位を16箇所に分け、着色した順序を調べた。

2.3 分析方法

各群の塗る順序について、記述統計量（平均値、中央値、標準偏差、最小値、最大値、パーセンタイル）を求めた。各部位を塗る順序の一貫性はKendallのW検定を用い、塗る順序における各部の相関はSpearmanの相関係数を用いて検定した。相関係数について、相関係数0.4以上0.7未満を中度の相関あり、0.7以上を強い相関ありとした。

統計分析にはSPSS-15.0J for Windowsを用い、有意水準を5%未満とした。

2.4 倫理的配慮

本研究における倫理的配慮は、ヘルシンキ宣言及び厚生労働省による臨床研究に関する倫理指針⁵⁾に基づき、大阪河崎リハビリテーション大学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認番号OKRU-120-6）。

3. 結果

3.1 塗る順序における記述統計量

健常成人群、デイケア群の塗る順序に関する記述統計量をそれぞれ表1、表2に示す。

健常成人群では、A:髪（男性）、B:顔（男性）、D:手足（男性）、I:杵は順序の平均値が5以下であることから多くの者が前半（全体順序の前半1/3）に着色していた。K:臼の餅、O:餅台の餅、P:背景は順序の平均値が11以上であることから後半（全体順序の後半1/3）に着色していた者が多かった。

デイケア群では、A:髪（男性）、C:服（男性）、E:髪（女性）、I:杵において前半（全体順序の前半1/3）に着色をしており、K:臼の餅、O:餅台の餅、P:背景において後半（全体順序の後半1/3）に着色していた者が多かった。

表1 塗る順序の記述統計量（健常成人群）

n=29

部位	平均値	標準偏差	最小値	最大値	パーセンタイル			
					25%	50%(中央値)	75%	
男性	A:髪	5.2	3.6	1	12	2	4	8.5
	B:顔	3.9	2.6	1	10	2	3	6
	C:服	7.1	3.7	1	14	4	7	10.5
	D:手足	4.5	2.7	1	11	2.5	4	7
女性	E:髪	7.3	3.4	1	13	6	8	10
	F:顔	7.1	2.4	2	13	5.5	7	8.5
	G:服	9.1	2.5	4	14	7	9	11
	H:手足	7.0	3.3	1	13	5	8	10
I:杵	4.8	3.7	1	12	1	4	8.5	
J:臼	6.5	3.9	1	14	3	6	10	
K:臼の餅	12.6	3.9	3	16	10.5	14	15	
L:桶	10.1	3.5	1	15	8	11	12.5	
M:桶台	10.7	3.7	3	16	9	11	13.5	
N:餅台	10.3	4.4	1	14	10	12	13	
O:餅台の餅	13.4	3.4	4	16	14	15	15	
P:背景	15.1	0.9	13	16	14	15	16	

表2 塗る順序の記述統計量（デイケア群）

n=18

部位	平均値	標準偏差	最小値	最大値	パーセンタイル			
					25%	50%(中央値)	75%	
男性	A:髪	4.5	3.45	1	13	1	4	7.25
	B:顔	9.0	4.60	2	15	4.75	9.5	13
	C:服	5.0	3.66	1	13	1.75	4	7
	D:手足	8.5	3.76	3	15	4.75	9.5	11
女性	E:髪	4.6	2.68	1	9	2	4	7.25
	F:顔	8.9	4.28	2	16	5	8.5	13
	G:服	7.7	3.44	2	15	5.75	7	9
	H:手足	9.0	3.74	4	15	5.75	9	12.25
I:杵	5.0	3.91	1	12	1	4	9	
J:臼	7.3	4.32	2	14	2.75	7.5	10.5	
K:臼の餅	11.6	3.84	2	16	9	13.5	14.25	
L:桶	8.8	3.90	3	15	5	9	12	
M:桶台	9.1	3.76	2	15	6.25	10.5	11.25	
N:餅台	7.4	4.19	1	13	3.5	7.5	11	
O:餅台の餅	12.8	3.19	6	16	9.75	14	15	
P:背景	15.1	1.59	10	16	14	16	16	

3.2 塗る順序の一貫性

各部位を塗る順序に対してKendallのW検定を行うと、健常成人群におけるKendallの一致係数は0.495、 $\chi^2=215.215$ 、 $p<0.001$ であり、デイケア群におけるKendallの一致係数は0.385、 $\chi^2=103.891$ 、 $p<0.001$ であった。健常成人群、デイケア群ともに前述の塗る順序については有意に一貫性があった。

3.3 塗る順序の相関

健常成人群における各部の相関について表3に示す。健常成人群では、正相関が10組、負相関が11組であった。有意な正相関を認められた部位の組み合わせの内訳は、A：髪（男性）とC：服（男性）、A：髪（男性）とE：髪（女性）、B：顔（男性）とC：服（男性）、B：顔（男性）とD：手足（男性）、D：手足（男性）とH：手足（女性）、E：髪（女性）とF：顔（女性）、E：髪（女性）とG：服（女性）、F：顔（女性）とH：手足（女性）、I：杵とJ：臼、N：餅台とO：餅台の餅であり、これらは塗る順序が統計的に近

いことを示している。有意な負相関を認められた部位の組み合わせの内訳では、A：髪（男性）とI：杵、A：髪（男性）とJ：臼、C：服（男性）とO：餅台の餅、D：手足（男性）とN：餅台、E：髪（女性）とI：杵、E：髪（女性）とJ：臼、F：顔（女性）とJ：臼、G：服（女性）とJ：臼、K：臼の餅とN：餅台、K：臼の餅とP：背景、O：餅台の餅とP：背景であり、これらは塗る順序が統計的に離れていることを示している。

デイケア群における各部の相関について表4に示す。デイケア群では、正相関が14組、負相関が17組であった。正相関の内訳は、A：髪（男性）とE：髪（女性）、B：顔（男性）とD：手足（男性）、B：顔（男性）とF：顔（女性）、B：顔（男性）とH：手足（女性）、D：手足（男性）とF：顔（女性）、D：手足（男性）とH：手足（女性）、F：顔（女性）とH：手足（女性）、I：杵とJ：臼、I：杵とL：桶、I：杵とM：桶台、J：臼とL：桶、J：臼とM：桶台、J：臼とP：背景、K：臼の餅とO：餅台の餅であった。負相関の内訳では、A：髪（男性）とI：杵、A：髪（男

表3 健常者群における塗る順序の相関

部位	男性				女性				I:杵	J:臼	K:臼の餅	L:桶	M:桶台	N:餅台	O:餅台の餅	P:背景	
	A:髪	B:顔	C:服	D:手足	E:髪	F:顔	G:服	H:手足									
A:髪	1	0.27	0.59**	-0.19	0.40*	0.06	0.16	-0.15	-0.50**	-0.57**	-0.04	-0.01	-0.20	-0.09	-0.15	0.03	
		B:顔	1	0.46*	0.46*	-0.34	0.03	-0.15	-0.05	-0.26	-0.28	0.19	-0.07	-0.09	-0.39	-0.26	-0.05
			C:服	1	0.10	-0.12	-0.13	0.07	-0.26	-0.09	-0.36	0.19	-0.20	-0.25	-0.33	-0.44*	0.16
				D:手足	1	-0.24	0.31	0.08	0.52**	-0.08	-0.08	0.17	-0.31	-0.15	-0.50**	-0.19	-0.02
					E:髪	1	0.56**	0.47*	0.35	-0.42*	-0.54**	-0.26	-0.09	-0.02	0.17	0.16	-0.13
						F:顔	1	0.32	0.84**	-0.28	-0.46*	-0.24	-0.25	-0.32	0.09	0.18	-0.09
							G:服	1	0.30	-0.26	-0.53**	-0.18	-0.13	-0.04	0.01	-0.22	0.20
								H:手足	1	-0.22	-0.30	-0.12	-0.28	-0.31	-0.01	0.15	-0.13
									I:杵	1	0.70**	-0.13	0.11	0.03	0.03	0	0.21
										J:臼	1	-0.05	0.14	0.09	0.06	0.17	0.07
											K:臼の餅	1	0.04	-0.28	-0.63**	-0.20	-0.48**
												L:桶	1	0.21	-0.14	-0.03	-0.19
													M:桶台	1	0	-0.25	0.10
														N:餅台	1	0.48**	0.30
															O:餅台の餅	1	-0.48**
																P:背景	1

Spearmanの相関係数を用いて各部の相関結果を示す。正相関部は塗る順序に近いことを示し、下線で示している。

表4 デイケア群における塗る順序の相関

**:p<0.01 *p<0.05 n=18

部位	男性				女性				I:杵	J:臼	K:臼の餅	L:桶	M:桶台	N:餅台	O:餅台の餅	P:背景
	A:髪	B:顔	C:服	D:手足	E:髪	F:顔	G:服	H:手足								
A:髪	1	0.17	0.44	0.14	0.54*	0.08	0	0.20	-0.63**	-0.61**	0.26	-0.37	-0.78**	-0.30	0.19	-0.49*
B:顔		1	-0.07	0.61**	0.21	0.93**	-0.29	0.52*	-0.50*	-0.40	-0.60*	-0.59**	-0.20	-0.24	-0.57*	-0.22
C:服			1	-0.12	0.05	-0.08	0.27	-0.07	-0.34	-0.19	0.18	-0.35	-0.41	-0.15	0.15	-0.08
D:手足				1	-0.09	0.53*	-0.61**	0.92**	-0.44	-0.35	-0.50*	-0.29	-0.17	-0.29	-0.27	-0.32
E:髪					1	0.25	0.24	0.14	-0.42	-0.34	0.01	-0.32	-0.28	-0.48*	-0.14	-0.10
F:顔						1	-0.12	0.50*	-0.47*	-0.48*	-0.49*	-0.56*	-0.15	-0.25	-0.50*	-0.22
G:服							1	-0.42	-0.04	-0.08	0.37	-0.20	0.05	0.14	0.09	0.11
H:手足								1	-0.59*	-0.41	-0.40	-0.36	-0.22	-0.37	-0.21	-0.33
I:杵									1	0.59**	-0.03	0.60**	0.65**	0.27	-0.03	0.34
J:臼										1	-0.16	0.62**	0.53*	-0.03	-0.25	0.78**
K:臼の餅											1	0.01	-0.30	0.24	0.63**	-0.36
L:桶												1	0.23	0.19	0.13	0.44
M:桶台													1	-0.03	-0.08	0.38
N:餅台														1	0.14	0
O:餅台の餅															1	-0.39
P:背景																1

Spearmanの相関係数を用いて各部の相関結果を示す。正相関部は塗る順序が近いことを示し、下線で示している。

性)とJ:臼、A:髪(男性)とM:桶台、A:髪(男性)とP:背景、B:顔(男性)とI:杵、B:顔(男性)とK:臼の餅、B:顔(男性)とL:桶、B:顔(男性)とO:餅台の餅、D:手足(男性)とG:服(女性)、D:手足(男性)とK:臼の餅、E:髪(女性)とN:餅台、F:顔(女性)とI:杵、F:顔(女性)とJ:臼、F:顔(女性)とK:臼の餅、F:顔(女性)とL:桶、F:顔(女性)とO:餅台の餅、H:手足(女性)とI:杵であり、同様に塗る順序が統計的に離れていることを示している。

4. 考察

古賀⁶⁾は、ぬり絵作業を進めていく過程を脳機能の観点から以下のように述べている。ここでは、まず後頭葉で下絵を見定め、前頭連合野で塗る際のプランを立て、運動野が命令を受けている。塗っている最中では、塗る対象が実在するものであれば実物の色に近いものを思い起こすような側頭葉の機能も働くとも述べてい

る。つまり、ぬり絵作業では1)下絵の見定め、2)塗る計画の実行、3)過去の記憶を思い起こす、4)色鉛筆で塗る作業が滞りなく遂行されるように作業療法士は配慮しなければならない。下絵を認識して各部位にどの色を塗るか判断することが始まらなければ、ぬり絵作業が始まらないことや、単に着色している作業になってしまう、ぬり絵活動を諦めてしまうことにつながる。

ぬり絵作業における作業療法士の役割として、1)下絵の見定めでは、下絵がどのような意味を持ったものであるか対象者にわかりやすく説明することや老眼鏡の提供、2)塗る計画の実行では、下絵のどの部位にどの色を着色するのか、対象者の意向を確認して助言すること、3)過去の記憶を思い起こすことでは、作業療法士との会話の中で対象者自身の回想を促すこと、4)色鉛筆で塗る作業では、鉛筆を持ちやすいように置く場所の調整や、鉛筆ホルダー等の自助具を調整することなどが挙げられる。佐久間⁷⁾は、ぬり絵の方法として、広い範囲

では色鉛筆を寝かせて塗ることで早く広く均一に塗ることや、細かい部位では削った色鉛筆を立てて塗ることを使い分けるような工夫を紹介しており、これらのことは作業療法士が塗る作業を指導するポイントと大差はないと考えられる。

今回の調査では、ぬり絵作業においてどのように塗るかという計画について平均的な塗る過程を調査した。その結果は塗る計画を立てることができない対象者に対し、どのような色付けが適切であるか助言を与える際の客観的な判断材料に用いることができると考えられる。

健常成人群では、A:髪(男性)、B:顔(男性)、D:手足(男性)、I:杵が全体順序の前半に取り組みされており、今回用いた下絵の主題である餅つきをしている男性とその男性が持つ杵から塗り始めていたことを示している。今回用いた下絵では、餅つきをする男性とそれを補佐する女性が主題となっており、今回の対象者ではその主題のうち下絵の占める面積の大きい男性とその男性の持つ杵から塗り始めていたことが考えられる。その反面、K:白の餅、O:餅台の餅、P:背景は後半に取り組みされていた。このことは、下絵の特性から、白色でも支障がなかったことや、白色に近い色でハイライトに仕上げる必要性があったためであると考えられる。古賀⁶⁾は、ぬり絵の塗り方において、色の重ね塗りをする際には下絵のハイライト(白いところ)を避けて塗り、背景を後半に塗るように述べている。今回の対象者も同様の取り組みを自然に行っていたためであると考えられる。これらのことから、下絵を塗る順序は部位の内容により前半や後半に分かれる傾向があり、健常成人群では塗る順序の一貫性があるという仮説が検証されたと考えられる。

デイケア群では、A:髪(男性)、C:服(男性)、E:髪(女性)、I:杵が前半に取り組みされており、健常成人群と同様に下絵の主題である

男性、杵、女性の一部から塗り始めていた。デイケア群と健常者群では、全く同じ順序で塗る傾向ではなかったが、年齢にあまり左右されない傾向であった。下絵の主題である男女の一部と男性の持つ杵から塗り始める傾向があり、男女の顔や手足は健常者群に比べてより中盤に取り組みされた傾向であった。着色をどのようにするか考える際、人が餅つきを行っている場面を回想したと考えられる。そこで過去の経験をもとに、黒い髪の男性が、茶色の杵を振り下ろそうとしているような餅つき場面を回想していたことが要因の一つと考えられる。これは、デイケア群では対象者の大半が杵と臼を用いた餅つきを経験していると推察されるためである。下絵の男女の顔では、表情など細かな色使いを考える必要があったことや、顔や手足などは肌の色に近づけるような薄い色を塗る必要性を考えたため、そのような色では前半に着色する過程が視覚的にわかりにくかったためではないかと考えられる。その反面、K:白の餅、O:餅台の餅、P:背景は健常者と同様に後半に取り組みしていた。このことも健常者同様に、白色に近い色であり、後半に塗る必要性があったためであると考えられる。これらのことから、デイケア群においても、塗る順序の一貫性があるという仮説が検証されたと考えられる。

塗る順序の相関について検討したところ、健常成人群では正相関が10組、負相関が11組、デイケア群では正相関が14組、負相関が17組であった。両群における正相関の組み合わせをそれぞれ図3、図4に示す。統計的結果から、正相関部位は塗る順序が近いと考えられ、これらの部位はお互いに塗る順序が前後している。このことについて、健常成人群では前半にA:髪(男性)とC:服(男性)という男性同士の部位や、A:髪(男性)とE:髪(女性)というように男女で同じ身体部位、I:杵とJ:臼というような同じ素材の部位が近い傾向であることが考え

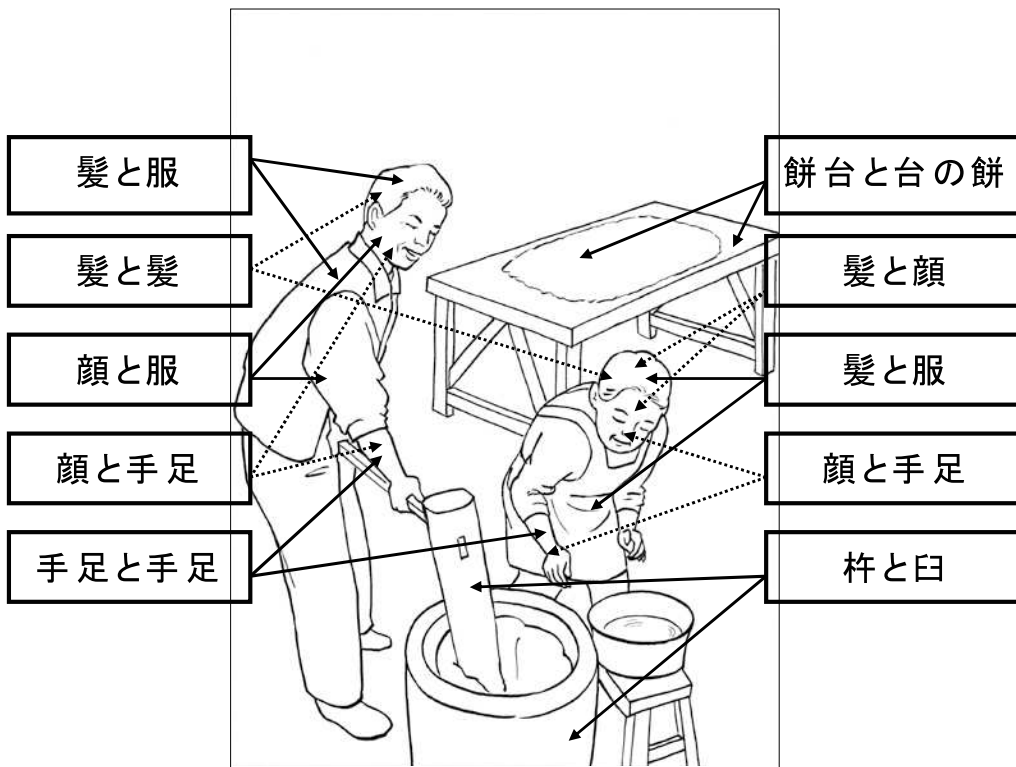


図3 健常成人群の正相関部位（文献4を一部改変）

健常成人群における正相関の10組で、部位や色が近いために塗る順序が近かったことを示している。

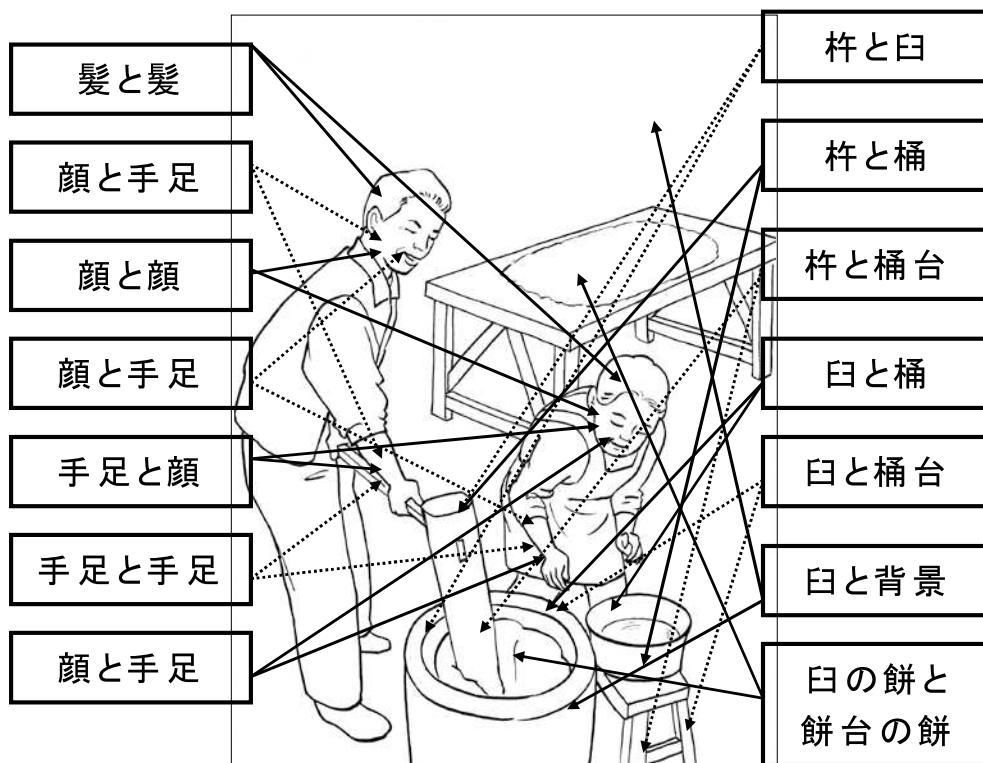


図4 デイケア群の正相関部位（文献4を一部改変）

デイケア群における正相関の14組で、部位や色が近いために塗る順序が近かったことを示している。

られる。このことは、部位が近いことや、素材が同じであることから同じ色で塗ることができることが要因であると考えられる。デイケア群では、健常成人群より正相関部位は多いが、J:白とP:背景という組み合わせのように後半に取り組み部位の順序の組み合わせが健常成人群より多く含まれているためであると考えられる。デイケア群でも健常者群と同様に、塗る部位が近いことや、塗る部位の色が同じ色であるために、これらの正相関部位14組は塗る順序が前後している結果となったと考えられる。

両群とも塗る順序が負相関であった組み合わせでは、塗る順序が離れているということしか言及することができない。これらの組み合わせの一方が前半に取り組みれば他方は中盤か後半に取り組みとすることであり、塗る順序が離れていることについて、作業療法場面における意味を見出しにくいので、それを臨床場面における助言に活用しにくいと考えられる。

デイケアにおける活動に関して、石田⁸⁾は利用時間中の全ての活動がリハビリであり、自分なりの楽しみをみつけて自信を回復していくことで在宅での活動の意欲向上につながられ、在宅生活に結びつけることが重要であると述べている。そのような観点からは、ぬり絵活動は比較的取り組みやすいものである。さらに、デイケア活動中の時間内に作業を終えることができなければ自宅に持ち帰ったり、時間が余れば新たに別の下絵に取り組みなど、柔軟に運用することができる。その際に、自分でどのように塗り進めていくかという計画ができることが前提になり、その計画は参加者の前頭連合野の働きによるものである⁶⁾。今回の調査における塗る順序の傾向は、参加者の年齢によらず一般化できる可能性が示唆された。参加対象者をさらに増加することでその根拠を強めることができると考えられる。今後の研究では、今回用いた下絵と異なるものでも、下絵の主題や同じ素材

の部位から取り組み始めていることを調査することで、塗る傾向を一般化できる可能性があると考えられる。

5. まとめ

本研究では、健常成人群とデイケア群においてぬり絵活動を実施し、取り組みの順序とその相関を調べることで塗る順序の傾向を調査した。その結果、健常者群、デイケア群ともに下絵の主題から塗り始める傾向であった。その後は、近接する部位や同じ素材の部位へ移っていくことが明らかになった。ここで得られた知見をもとに、デイケア利用者へぬり絵活動を導入する際、塗る計画を立てることが円滑にできない対象者に対しては、今回の結果をもとに助言をしていくことで、ぬり絵作業が滞りなく進められていく可能性が示唆された。

文献

- 1) 野田和恵「ぬり絵」の活用方法と効果“古川宏編集 作業療法のとらえ方PART2”文光堂, 東京, 2008, p.112-125.
- 2) 日本作業療法士協会白書委員会編 作業療法士の臨床活動 作業療法白書2005. 作業療法2006, 25:25-53.
- 3) 野田和恵、古川宏、山口三千夫 在宅身体障害者と健常者におけるぬり絵活動の比較. 神戸大学医学部保健学科紀要1998, 14:87-92.
- 4) マークワークス編集・制作“大人のぬり絵帖 第壱巻”(有)Q.O.L.サービス, 広島, 2005, p.123.
- 5) 厚生労働省 臨床研究に関する倫理指針 オンライン<<http://www.mhlw.go.jp/general/seido/kousei/i-kenkyu/rinsyo/dl/shishin.pdf>>, (accessed 2010-8-30).
- 6) 古賀良彦“脳をリフレッシュする大人のぬり絵”きこ書房, 東京, 2005, p.2-12.

- 7) 日本ぬり絵協会、佐久間誉之“大人のぬり絵帖”
東京書籍，東京，2007，p.15-22.
- 8) 石田康子 “「通所リハビリ」での効果を在宅生

活に生かすための取り組み” 月間デイ10月号，
(株)QOL，広島，2010. p.28-33.